

# 人生を科学的に生きてみよう

これからの当社を担う若手社員・新入社員との談話（2012/02/22）

株式会社ビッドシステム 谷 径史

## 【前提】

これから話すことは、私の個人的な見解です。ですから、これに同意する必要はないし、異なる意見を持つことは一向に構いません。同意することが、社員の条件になるものではありません。しかし、私はビッドシステムの社長ですので、ビッドシステムがどういう会社なのかを把握するうえでは重要な話となると思います。

一般的に言って、この社会で生きていく場合、様々な障害・困難があり、場合によっては傷つくこともあります。そのためどうしても自己防衛的になっていきます。自己防衛のひとつの方法として、自分の世界を狭めるということがあります。限定された範囲で関わり、限定された範囲での幸福を追求するというわけです。この方法は、他人を攻撃するものではないので、リスクが少なく、受け入れやすいものです。

しかし、どんなに自分の世界を狭め、関わる範囲を限定したとしても、それとは関係なく世界は存在し、社会は存在し、歴史は変化・発展していきます。ですから物事を科学的に考える以上、こうした現実を正面に見据え、取り組んで行く以外にありません。これは、好むと好まざるとに関係のないことです。

今日は当社、ビッドシステムについて話をします。会社には、いろいろな会社があります。これはいい悪いという問題ではありません。会社の特長ということに過ぎません。当社は、社員の皆があまり自己防衛的にならずに、安心して思う存分自分の能力を発揮することができる環境を提供したいと考えています。この根拠について話をします。

## 【自分の意見を持つということについて】

「イエスマン」という言葉があります。上司のいうことに、いつも「はい」と言って肯定的な対応ばかりをする人のことを指します。社長の指示に従わないのでは困りますが、「イエスマン」になる必要はありません。

別の異なる意見を言うと、風当たりが強くなったりすることもあります。「出る杭は打たれる」と言われますが、打たれてこそ強くなるということもできます。

当社も、お客様との会議のなかで、お客様のご要望に従うだけでなく、お客様の考えに意見を述べることもありましたが、結果的にそのことがお客様との信頼関係を強めることになりました。

では、意見や考えは一致していた方がよいのか、いろいろな意見があった方がよいのか。意見の違いは、発展の原動力になります。だからといって、様々な意見があるのが当然というわけではありません。異なる意見のどちらが、より合理的で科学的で妥当性があるかが重要です。また両者の意見を踏まえると、もっと内容の豊かなものが新しく生まれるかも知れません。これは私の意見、それはあなたの意見ということではなく、両者のなかからそのより本質的なものを探しだし、新しい発展したものを生み出す作業が必要になります。世の中に様々な意見があるということ自体は事実ですが、そのままよいということではなく、ましてや、「誰々がそう言ったから」というのは論外です。

## 【責任を負うということについて】

なかなか責任をとることが好きな人はいません。責任を取れるということは、それだけ大きな権限を持っていることを意味しているのにも関わらず、そうなのです。

なぜ責任を取ることを嫌がるのか。それは責任のとり方を知らない、責任をとるという意味を知らない、「悪いのは自分だ」ということが責任をとるということだと思っている等々の理由からではないかと思います。

私は、責任をとるということは、次のようなことではないかと考えています。

自分が、あのとき、こうすれば、問題を引き起こさなくて済んだ。自分の力で、解決できたはずだ。そもそも、自分はそうしたかったし、自分が自分らしくあるためには、そうする必要があった。これは、自分自身が、今後、どのように生きていくかという問題だ。だから、今後は、必ず、問題を解決できる。それは自分がより自分らしくなるということを意味している。…

こういったことが納得できるまで、繰り返してじっくり考えることが大切になります。繰り返しになりますが、責任を取るということには、見方を変えれば、自分がより自分らしく生きていくという内容が含まれています。ここには明らかに成長の芽があります。問題が発生したとき、自分の責任の問題として捉えるのではなく、誰々からこういわれたからこうなった、などというのは、最も卑怯な対応だと思います。

もちろん、責任をとれない問題というものもあります。この社会の中で仕事をするのだから、すべてにおいて責任を負うことができるわけではありません。こうした場合は、別の軸で問題を整理しなおすこととなります。

## 【会社とは何かについて】

当社では、会社は、「場」であるという考え方をしています。即ち、別々の人間(社員)が一定の時間と空間を共有する「場」です。当社では、この会社に骨を埋める(一度入社したのだから一生この会社で働く)という考えはしていません。社員は、皆、それぞれの人生があり、歴史があり、その成長・発展の途上で一定の時期を、この会社で過ごすことになるに過ぎません。会社は、皆の人生に責任を負うことはしないし、またできません。たまたま、ある一時期に限って、時間と空間をともにしているというわけです。

では、そこでの重要なポイントはなにか。それはこの限定された条件のなかで、いかに多くのものを獲得できるか、何が学べるか、互いに刺激しあい、影響し合えるかということです。

当社に何も期待できないなら、直ぐ辞めた方がいいですし、当社に何かしら期待しているなら、寸時を惜しんで没頭した方がいいと思います。

会社に留まるべきか、それとも出て行くべきか。会社に留まることで、様々なことが学べ、また組織的に動くことでお客様とも関わることができ、力を発揮することができます。会社という組織のなかで、初めて社会的に有意義な働きが可能になります。反面、会社を出て行くと、会社の枠にとらわれない、もっと多くの可能性を手にするかも知れません。このどちらが、社会全体にとって有益かどうか判断の基準になります。

では、当社で育った優秀な社員が辞めていったら、その人には新しい可能性が開けるかも知れませんが、会社はどうなるのでしょうか？私はその社員の会社での業績は会社という組織に蓄積されていますので、別の社員に新しいチャンスが与えられることになり、会社もまた、新しい発展の可能性を手にする事ができると思います。

ビッドシステムでは、会社に関して、ひとつの実験しているようなものです。現在の日本の経済社会での責任ある基本単位は、「会社」ということになります。会社で勝負することが重要です。会社として勝ち抜くことを通してはじめて、教育面でも価値観の観点でも社会関係性という意味でも様々な取り組みをすることができます。ですから決して負けることはできないのです。

## 【働くということについて】

私たちは何のために働くのでしょうか？これはよくあるテーマです。生活のため。家族のため。趣味のため。お金のため。健康のため。仕事が好きだから。自己実現のため……。この問いかけは、働くことに対する目的意識性を問う場合が多いですが、それだけでは足りないのではないかと思います。

まず、この社会のなかでの労働の性格について考えてみましょう。

一人の人が、月160時間位働くとして、その給与が15万円だったとします。この15万円は、何を基準に設定されるのでしょうか？もちろん直接的にはその会社の賃金規定によって決められるのですが、その妥当性の根拠はどこにあるのでしょうか？最低賃金制という制度があります。群馬県の場合は、1時間あたり690円位のようなようです。この根拠はどこにあるのでしょうか？

最低賃金というのは、労働者が健康的で文化的な最低限度の生活を営むことができる金額とされています。すなわち、1日働いた後、食事をとり、休息をとり、明日また元気になって働くことができるようになるための必要経費というわけです。これを労働力の再生産といいます。働くことで労働力を消費するのですから、その再生産のために必要な金額が、その労働力の価値(の価格としての表現)ということになります。消費した分が回復できるのですから、極めて妥当な契約といえることができます。実際には、家族のための費用や、熟練した技術を身に付けるためにかかった費

用など、様々な要素が加味されてくるわけですが、これが賃金の妥当性の基本的な考え方になります。

では次に、その労働によって生み出された新たな価値は、誰のものになるのでしょうか？これは会社のオーナーのものになります。これも考えてみればあたりまえです。オーナーは労働者に正  
当な賃金を払うことで労働力を購入し、また生産のための設備を準備し、材料を購入し、これら  
うまく使って新しい価値を生み出したのですから、この成果は当然オーナーのものになります。

ここで、労働力という「商品」がその消費によって生み出す新たな価値の方が、その労働力の再  
生産のために必要な価値より大きかったらどうなるのでしょうか？働く側にとっては消費した分が  
再生産されるだけですが、労働力の消費によって生産される新しい価値との差分(剰余価値)は  
常にオーナーの側に蓄積されていくことになります。ここに、今日の社会の経済的基本的構造が  
あります。

働く側にとっては、労働は賃金を得るため時間で切り売りされるものとなり、その労働の直接の  
成果物とは無縁のものになりますので、労働自体は自分のためのものではなく、疎外されたもの  
になっていきます。仕事というものはつらいものだ。我慢して生活のためにはたらくのは当然だ。せ  
っかくなら、できれば自分の好きな仕事がうれしい。こいうった感覚は、すべて労働それ自体が疎  
外されたものであることを暗黙の前提としているといえます。これ以外の考えは全く存在しないよう  
な状態です。

あたらしい価値を創造することのできる労働は、本来これ自体が自己実現そのものであり、喜  
びそのものであっていいはずですが。当社では、労働の考え方そのものを根本的に変える必要があ  
ると考えています。

## 【賃金について】

この社会では、公平な賃金制度を作り上げるのは困難です。何らかの不公平感は拭い去れません。

公平な賃金とは、いかえれば、必要なものがすべて無料で手に入るような状態ということができます。能力に応じて働いた成果を持ち寄り、これを担保にして、生活物資や、教育、娯楽、福祉、医療といったものが無料の社会ということになります。ヨーロッパのいくつかの国々の豊かな社会保障制度などに、この試みをみることができます。

すべてが無料になり競争がなくなると人間は働かなくなってしまう、経済が停滞し、発展しなくなってしまうのではないのでしょうか？ そうした例も実際にあります。すべてが無料になり競争がなくなっても、労働意欲が衰えることなく、継続して経済が発展していくためには、構成員に対する教育が重要であり、構成員の高度の自覚が必要になってきます。しかしこれまでの歴史は、この制度の実現は並大抵のことではないことを示しています。すでに考察したとおり、労働がそれ自体の価値としてではなく、労働の対価としての報酬としてだけ評価され、報酬の額があたかもその人の人間としての価値の尺度であるかのように考えられる構造があるわけですので、これは当然のことと言えます。人間もまた動物であるということを論拠にすることで、こうした制度が現実にはありえないという考え方もあります。

当社では、これまで、業績に応じて給与を決めるという方法を基本的にとってきませんでした。なぜなら、能力の高い者がより多くの仕事ができ、多くの成果を上げるのはある意味当然ではないかと考えてきたからです。その高い能力はどのようにして培われたのか。遺伝的要素もあつたかも知れません。

ここで能力とは誰のものかという問題提起ができます。個人のものとはばかりはいえません。能力はどのような環境で教育をうけ、どのような訓練を受けたのかによって変わってきます。言い換えれば、一部の天才は別にして、環境さえ整えば誰だって相応の能力を身に付ける可能性があったということです。

能力には社会的関係の産物としての性格があります。個々人の側から考えるなら、たまたま差がついただけであり、たまたまその担い手が自分だったということです。自分でなかったかかも知れないし、少し環境が違えば、全く別の人生になったかも知れません。

社会的関係の産物としての性格をもつ能力の担い手は、それをただ単に自分個人のためだけに使うのでは足りません。能力のある者は社会的により多くの仕事をすべきだし、またそれができるわけです。

賃金を、その人の売上への貢献度に応じて決めるという考え方がありますが、これは能力を個人のものとして捉えることを基礎にしています。この考え方は、また労働の成果のより公平な分配の方法として言われていますが、分配の決定権がオーナーにあるという本質には何ら変わりはありません。

このように考えると、能力があり多くの成果を上げることのできる社員に対して、オーナーによる業績評価で報酬に差をつけることが公平な制度とは言い切れません。そこで当社では、利益が上がった場合は、原則としてこれを等分して分配してきました。能力に応じて働き、その労働の成果とは直接関係なく各自が必要かつ十分な報酬を受取る制度に科学的妥当性があるのか、実現可能性があるのかどうかを、実際場で研究したいと考えています。そのためには何としてもその担保となる売上を上げる必要があります。

自分には能力があるのだから、他人より高い報酬を受取る権利があるという考えは、当社にはなじまないかも知れません。

## 【会社の行う社会貢献について】

会社は利益を上げると法人税を払うことになります。税金は広く社会のために使われます。このことから、利益を上げ法人税を払うことが、会社にとっての社会貢献であるということが言われ、会社が利益を追求することを正当化するひとつの論拠になっています。

今日の世の中であって、不幸のその多くは、経済的が要因によるものが多いです。経済的に余裕があれば、世の中の不幸の多くは防ぐことができます。また経済が成長すると、それにつれて文化が成長します。発展した文化、豊かな人間性は、発展した経済を背景にしています。これは歴史的にみても、また地球的規模で見てもいえることであり、経済の発展なくして文化の発展や人間性の豊かさを語ることはできません。とすれば、如何に経済を発展させるのかが最も重要なテーマになります。

では、日本の経済を発展させるための環はどこにあるのでしょうか。中小企業の発展が重要であると思います。一時期、勝ち組と負け組ということが言われました。そこでは、如何に勝ち組と手を組むかが重要なマーケティングの戦略と位置づけられました。負け組には負け組になる原因があると思います。もしいわゆる負け組が、その弱点を解決し、強くなっていったら、日本の経済の姿は変わってくるかも知れません。一部の大企業の勝ち組に頼るのではなく、経済の基盤を支える多くの中小企業がその力を強くし、これまでの勝ち組と互角に競えるようになると、本当に素晴らしいことになると思います。

当社は、コンピュータのソフトウェアを開発する会社です。優れたコンピュータのソフトウェアは、生産性の向上に対して、極めて大きい貢献をすることができます。また当社は企業規模からして、

中小企業を主な顧客にしています。当社では、自己の能力を高め、品質のよいソフトウェア製品を開発し、提供していくことそのこと自体が、当社が行うべき社会的貢献そのものであると位置づけています。

## 【自由について】

誰も、自由でありたいと願っています。ひとことで自由といっても、人それぞれ考え内容は同じではありません。束縛がないこと。好きに過ごせること。多くの選択肢があること……。しかし、選択肢が多いことが自由なのではありません。自由とは、多くの選択肢の中から、最も適切なものを選択することのできる「能力」のことであると考えた方が合理的です。

自然界に自然法則があるように、社会にも原因から結果に繋がっていく因果関係の法則があります。これは、自然法則がそうであるように、その人が好むと好まざるに関わらず作用します。合理的な因果関係を無視した選択をしても、望む結果を得ることはできません。望む結果を手にするためには、物事の関係性を理解し、作用と反作用、原因結果の関係、様々な環境要因を適切に分析し、妥当性があり効果的な働きかけをする必要があります。こうした分析が適切であればあるほど、期待通りの結果を手にすることができます。これが、自由の意味であり、「自由とは必然性の洞察である」といわれる所以です。逆説的にいうなら、自由であればあるほど、選択肢は狭く絞られていくわけです。

これまで、人類史はどのように発展してきたのでしょうか。原始時代、何もありませんでした。生産力が低く、僅かな食料を分け合い、いつも飢えと外敵の恐怖に苛まれながら集団で生きる以外はありませんでした。その後、古代、中世と発展するなかで、生産力の発展し、様々な文化の発展していきました。

余談ですが、奈良時代や室町時代には、妖怪や鬼の物語が多く語られ、江戸時代には幽霊の話が語られますが、これも当時の人間がコントロールできる領域が狭かったことの反映であるように思います。多分、江戸時代では、この世に生を受けても、不幸な一生を終わる人が多かったのではないのでしょうか？だからこの世を恨む幽霊の物語が生まれたのではないかと思います。

そして、近代の産業革命をへて現代に至り、人間は高い生産力を手にしました。この高い生産力は地球そのものまで破壊してしまうような勢いです。一方で高い生産力を手にしながらも、他方で貧富の差があり、格差があり、不正・不条理が蔓延り、徹底した個人主義が様々な価値観の共通の前提となっています。

100万年前から続く長い人類の歴史の中で、こうした時代に私たちは生をうけてしまいました。この時代の中で、自由に生きるということを考えたとき、歴史の歩みを今一步推し進め、世の中の不幸を少しでも無くすために何ができるかということが重要になってきます。幸運なことに、皆はコンピュータのソフトウェアを開発する会社に入社したわけです。このことを行う有効なツールを手にしています。

人間の寿命は、纏まったことを成し遂げるにはあまりにも短いものです。人生が短いということから導き出される結論は、必ずしも自分の心のままに生きるということではありません。時代が私たちに要求している課題に辛抱強く取り組み、一生でできないなら次の世代に引き継ぎ、またその次の世代に引き継いでいく必要があるということです。当然のことながらこうしたビッドシステムの考え方自体も特別なものではなく、これまでの歴史のなかで様々な研究を行い、取り組みをしてきた多くの人々の経験や知恵を学び、継承したものに過ぎません。ですから、今日でも結構多くの人が、全国各地で同じような思いで日々を送っているのではないかという思いがあります。

## 【多くの人々の人生との関わり】

皆は仕事の中で、これから様々な人と関わりをもっていくこととなります。人間は社会的な存在ですから、こうした社会関係のなかで、どういう役割が果たせるのかということで人間の価値が決まっていきます。

自分にとっては、自分ひとりの人生しかありません。これと同じことがすべての人に言えます。この社会には、人の人数分だけの人生があり世界があり、それぞれの人生それぞれの世界での主役は、その人自身になるわけです。このような限りなく豊かで、多元的な社会関係の中で、自分がどう関わっていくのかということが問題になります。自分にとっては自分の世界がすべてであるということは、相手にとって自分は、数多くの環境要素の中のひとつの要素にすぎないということになります。この一要素としての立ち位置からの関わりという認識が大切だと思います。

お客様とお話をする場合、お客様の背景にあるお客様自身の社会、歴史、人生を考え、この集大成として目の前にお客様がいるという認識にたつて、どのようにお役にたてるのかを考えていく必要があります。まして、コンピュータソフトウェアという商品は、目に見えるものでもないし、決して安いものでもありません。ですからお客様との信頼関係を、次元の違うレベルで培っていく必要がありますし、またこのこと自体が、新しい社会関係構築のためのひとつの取り組みの意味合いを持つものであると考えています。

以前NHKで、地球46億年の歴史は、繁栄した種の滅亡の歴史であったという内容の番組があり、人間も例外ではありえず、人間の未来は社会的協力関係をどう発展させられるかにかかっているという趣旨の提言がなされたことがありました(「地球大進化」(2004年))。

人間を、社会的歴史的な存在として総体として捉えたとき、もちろん寿命は重要だが、寿命がすべてではなく、あたかも個々の細胞が常に生まれ変わりながら一人の人間の生命を維持しているよ

うに、人間もまた、個々人のかけがえのない人生に支えられながら、社会的歴史的に継承され総体として成長していくという別の姿が見えてきます。長期にわたる、多くの人間の振る舞いにより、社会が発展し歴史が作られ、今日の世界があり、また未来があるというわけです。

ビッドシステムでは、品質方針の2番目に、「当社は、来るべき時代に適合した新しい情報文化の創造を追求します」と定めています。抽象的な表現ではありますが、この「来るべき時代に適合した新しい情報文化」と言葉の中には、こうした社会、会社、労働、そして人の生き方についての考えかたが込められています。

5年後、10年後のビッドシステムを考えてみると、きっと君たちが第一線で思う存分能力を発揮し、活躍しているのではないかと思います。楽しみでなりません。